

自ら学び・ともに学ぶ力の育成

－実践的な態度を育てる学習指導の工夫－

伊藤秀哲 戸田淳子

1 研究テーマ設定の趣旨

本校では、従来から、実践的・体験的な学習を通して習得した知識と技能を活用し、生活を工夫し創造する能力と実践する態度を育てるため、問題解決的な学習の工夫をはかってきた。昨年度からは、コミュニケーションする力を活用して「自ら学ぶ力」と「ともに学ぶ力」を育成することで、問題解決的な能力を高めることを研究している。「自ら学ぶ力」とは、個人の課題設定や解決・検証、反省・評価などの問題解決的な学習の場面で主体的に活動する力であり、コミュニケーションすることで、各自の課題を明らかにしたり、新たな課題を考えたりすることができるようになると思った。また、「ともに学ぶ力」とは、実践的・体験的な学習のグループにおいて客観的に思考・判断する力や協調する態度であり、他者との話し合いや協力する活動の中で、コミュニケーションすることで、教師と生徒、生徒同士、生徒と家族などのかかわりを深めることができるようになると思った。そして、これらの力を育成することで、技術・家庭科の目標である「進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度の育成」をはかりたいと考え、研究主題を設定した。

2 研究計画

1 第1年次（平成17年度）

- (1) 本教科における「自ら学び・ともに学ぶ力」について
- (2) 本教科の授業改善の手だて

2 第2年次（平成18年度）

- (1) 本教科における「自ら学び・ともに学ぶ力」についての修正・改善
- (2) 「自ら学び・ともに学ぶ力」に視点を当てた授業の実践

3 第3年次（平成19年度）

- (1) 本教科の授業改善の手だてと評価
- (2) 本教科の「自ら学び・ともに学ぶ力」を具体化した年間指導計画の作成
- (3) 研究のまとめと今後の課題

3 昨年度までの研究

「自ら学ぶ力」としての主体的に活動する力と、「ともに学ぶ力」としての客観的に思考・判断する力や強調する態度を育成するために、生徒の実態に即した内容や活動を工夫し、自ら課題を見いだし解決できる問題解決的な学習を展開する。また、家庭や地域社会との連携をはかり、適切な題材を設定することが大切であると考え。そこで、実践的・体験的な学習の中で、コミュニケーションする力を活用する場を設定したり、学習内容を工夫したりすることで、実践的な態度を養おうと考えた。

1 「自ら学び・ともに学ぶ力」の育成とコミュニケーションする力の活用について

「自ら学ぶ力」では、コミュニケーションする力の知識・技能の活用を考え「自分の思いや考えを的確に表現する力」や「他者からの情報を正確に理解したり込められた意図を理解する力」「話し合いを円滑に進める力」を活用して、問題解決的な学習において主体的に活動する力を養う。「ともに学ぶ力」では、コミュニケーションへの関心・意欲・態度としての「他者とのかかわりへの関心」「コミュニケーションしようとする意欲」「互いの個性を尊重し合う態度」「合意形成しようとする態度」を活用して、客観的に思考・判断する力や協調する態度を養う。

次に、技術・家庭科における問題解決的な学習と「自ら学び・ともに学ぶ力」の関係を示す。

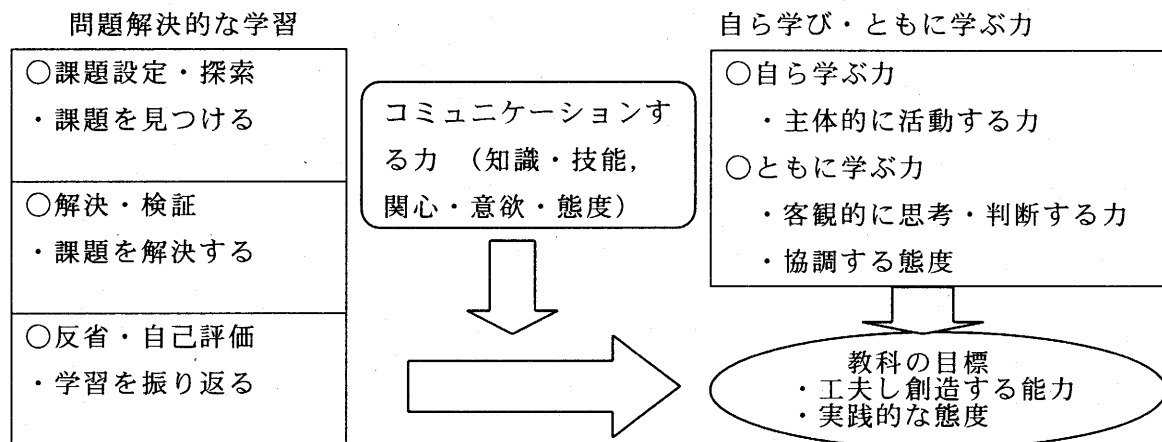


図1 技術・家庭科における問題解決的な学習と「自ら学び・ともに学ぶ力」の関係

2 技術・家庭科におけるコミュニケーションする力の活用について

コミュニケーションする力を活用するためには、実践的・体験的な学習の中で、コミュニケーションの場の設定と指導内容の工夫が必要である。グループ活動での人とのかかわりや情報の交換等で「他者からの意見・情報を理解すること」「自分自身の思いや考えを自由に表現すること」「話し合いを円滑にすること」のために、コミュニケーションする力の活用を意図的に行う。また、グループ活動では、問題解決的な学習の過程での調査・研究や問題の考え方・解決の仕方等の話し合いを工夫し意見の調整や考えの練り上げのために、グループとしての意思決定の場でのコミュニケーションする力の活用が必要である。問題解決的な学習の中でコミュニケーションすることが、他人を認めたり、自分のよさを

認識したりすることになり、学習意欲の向上につながると考える。さらに、他者から認められることで、工夫し創造する楽しさを実感できるようになるだけでなく、協調する態度や実践する態度の育成に有効にはたらくと考える。授業改善の具体的な手だてとしては、学習効果をあげるために、学習の目標を明らかにすることや他者との話し合いや協力などの場を設定すること、客観的な自己評価・相互評価のための評価の工夫をすることが必要であると考え、教材・教具や学習指導を工夫した。また、選択授業など発展的な内容の指導では、T・Tの活用で学習指導の充実をはかることも考えた。

4 本年度の研究

1 研究の内容

技術・家庭科の「ものづくり」や実習などにおけるグループ活動は、知識や技能を身につけるだけではなく、コミュニケーションをはかることで、一人ではわからなかったことやできなかったことが、わかったりできたりすることから、学習の効果を上げる方法として有効にはたらくものであると考えた。そこで、本年度は、生活をよりよくするために、「誰のために、どんな方法で、何をどのように使って、何を作り上げるか」を具体的に示し、コミュニケーションする力を活用できるような活動の工夫をすることで、「自ら学び・ともに学ぶ力」の育成がはかれるようにする。コミュニケーションする力の活用をする際、教師と生徒のかかわり、生徒と生徒のかかわり、生徒と家族や社会とのかかわりを意識させる学習内容の工夫をする。また、グループ活動で、一人一人の持っている力を出し合い、その力をいかして、よりよいものが作れるようにさせる工夫をする。これらのことを実践的・体験的な学習の中で実践することで、生徒の学習や生活への関心・意欲を高め、学習したことを生活へいかす実践力を育てていきたいと考えた。そのために、以下のような内容について具体的に研究を進めることにした。各項についての実践例を示す。

- (1) 実践的・体験的な学習での目標の明確化とコミュニケーションの場の設定
- (2) 人とのかかわりや情報の交換のためのグループ活動の工夫
- (3) 客観的な自己評価・相互評価のための評価の工夫

2 学習指導の工夫とコミュニケーションする力の活用の実践

(1) 実践的・体験的な学習での目標の明確化とコミュニケーションの場の設定

はじめに、生徒の興味・関心の内容や実態を把握してから、学習したことが実践に結びつけやすい題材を取り上げるようにした。実践的・体験的な学習および問題解決的な学習の課題設定や課題探索時には、学習への関心・意欲を高めるため、授業のはじめに学習目標と具体的な活動内容や指標を示し、各自の学習活動の目標を明らかにさせた。その際、「誰のためにという対象者を考えさせる」「何を使ってという道具や材料を考えさせる」「どのようにしてという方法を考えさせる」「最終的にどうなるかという目標や結果の予測をさせる」など、より具体的に話し合わせるようにした。このようなグループでの話し合いや教師からの問答やアドバイスなど、コミュニケーションする場を意図的に設けることで、「自ら学ぶ力」にかかわる主体的に活動する力の育成をはかれるようにした。

ア 技術科：生活に役立つ製作品を設計する学習で、グループでの話し合いをもとに自分の作品の構想を練る活動の例（第1学年）

ものづくりの題材として「生活に役立つものの製作」を取り扱っている。設計の授業では、はじめに設計のすすめ方を確認させた後で、自分のつくりたい製作品を決め、使用目的や使用条件を考え、スケッチに表すようにさせている。その際、「どんな使い方をするのか」「誰のために作るのか」「何を収納するのか」などを実際に自分の家を見てきたり、家族と話し合わせたりしながら考えさせるようにする。そして、「どんな作品に仕上げるか」「どんな工夫をしていくのか」などを生徒同士の話し合いから考えさせ、それらの考えをワークシートにまとめさせるようにした。

指導にあたっては、生徒のアイデアを生かせるよう配慮しながら、自由な発想で用紙に記入させるようにした。また、生徒の状況に応じた手だてを準備しておき、掲示物や支援教具を活用するようにした。さらに、教師と生徒が達成目標を確認する手法として、ループリック（具体的評価指標）も利用した。ループリックとは、「○○ができたらA、○○ができたらB、○○ができたらC、・・・」というように、到達目標を段階的に具体化したものである。これを授業の序盤で示し、どこまでできるかを決めさせることで、意欲を持たせるとともに、終末の自己評価に客観性を持たせることができるようにした。表2につくる製作品を決定し、構想用紙を作成する授業のループリックの例を示す。

表1 指導の手だての例

生徒の様子	指導の手だて
◎使用目的や使用条件をまとめ、スケッチがかけている。	・デザイン、機能、寸法など、よりくわしく記入するようにさせる。
○使用目的や使用条件を考え、スケッチを描こうとしている。	・機能などを考えてよりわかりやすく具体的な記入しておくようアドバイスする。
△使用目的や使用条件が書けていない。 △スケッチがかけていない。	・整理したい物や誰が使うかなど具体的に考えさせる。 ・作図例を提示し、参考にさせながら描画させる。
△製作品が決定しない。	・作品例を示す。 ・自分や家族のもので整理したいものを考えさせる。



写真 製作品の検討における話し合いの様子

表2 ループリック（具体的評価指標）の例

「つくる製作品を決めよう」

A	つくりたい製作品の使用目的や使用条件を具体的にまとめ、スケッチにかき表すことができた。	○
B	つくりたい製作品の使用目的や使用条件をまとめ、具体的な形を考えることができた。	
C	家での調査や話し合いから、つくりたい製作品の使用目的や使用条件を考えることができた。	

イ 家庭科：幼稚園訪問にあたり幼児とのかかわりをもつために、何ができるかを考えさせる学習で、各自の活動目標をもとにグループの活動を考えさせる例（第3学年）

幼稚園訪問の目的を明確にするために、幼児の特徴や成長についての既習内容確認と身近な幼児の観察を通しての身体的特徴・言葉・動作・遊びの様子の把握をさせる。各自の得意なことやできることの課題をもとにグループをつくる。また、各自の知識や経験を加味して話し合いをし、グループの活動内容を決定させる。一人で考えるよりも協力することで、活動への自信や内容の幅を広げさせることができ、よりよい活動ができるようになる。その際、「誰のために、どんな方法で、何をどのように使って、何を作り上げるか」を明確にさせる。そこで、活動内容を考えるときには、ただ遊ぶだけでなく、「対象幼児の年齢や幼児の発達段階にあわせた内容であること、幼児の興味・関心にあわせて幼児を楽しませる工夫をすること、幼児を安全に遊ばせること」などを考えさせる。

表3 幼稚園訪問計画で考えること

- グループの人数は2～6人とする（同じ活動内容の生徒同士でグループを組む）
- どんな活動がしたいかを具体的に書く
 - ・自分ができることや得意なことは何ですか…幼児との活動経験、趣味や特技、部活など
 - ・どんな幼児とふれあいたいですか…何歳児：身体の発達、言葉の発達、興味・関心など
 - ・どこで(場所)活動したいですか…：室内（各教室、廊下、ベランダ、遊戯室）屋外（中庭、園庭）
 - ・幼児と一緒に何かをしますか…ものをつくる、体を動かす、幼児を楽しませる
 - ・幼児を何かで遊ばせますか…体を使って、手作りおもちゃを使って、遊具を使って
 - ・用意するものは何ですか…説明用絵図、遊ぶ道具を作っていく、プレゼントを作る

【生徒の計画から】

- ・得意なことは、絵を描くことなので、幼児の好きな絵で一緒にお絵かきをしたい。
- ・吹奏楽部で音楽が得意なので、演奏をきかせたり、幼児と一緒に楽器を演奏したい。
- ・外での運動が得意なので、サッカーを一緒にして体を動かしたい。ルールをわかりやすく説明したい。優勝トロフィーやメダルをつくってプレゼントしたい。

生徒の実態と目標を明らかにして、各自が何をどのように使って、どう動くかを具体的に考えさせることで、グループでの活動がスムーズできるようになった。

(2) 人とのかかわりや情報の交換のためのグループ活動の工夫

製作や実習におけるグループ活動を通して実践的態度を育てるため、コミュニケーションする力の話し合いの技能を使って、自己の意思をはっきりさせ、他者の意見を聞くことで他者との協調する態度の育成をはかろうと考えた。問題解決的な学習の中で、生徒と教師の問答や生徒同士の話し合い、互いに協力し合うことは、より実践的な解決の仕方を考えさせるために必要である。実際の行動では、生徒と教師、生徒同士、生徒と家族とのコミュニケーションをはかれるようにする。特に、実習や製作では、言葉や図で書かれたことだけでなく、実習や製作の過程でのやりとりの中で、感覚（見る、触る、味わう、嗅ぐなど）で見取ることも技術・家庭科でのコミュニケーションとして加味して評価にもいかに。例えば、生徒と生徒との「どうしようか」「これでいいかな」「できた、やったね」などの次の活動にはいるための質問、手順や知識の確認、結果に対する賞賛の言葉は、生徒のその場

の活動に対する関心・意欲を高める。生徒と教師の「これでいいんだよ」「じょうずによくできたね」「ここを直すといいね」などの活動手順の確認、その場の評価、認めほめることは、次の活動への意欲を高め、技能の向上にもつなげられる。

また、知識・技能の補い合いがはかれるような話し合いが深まる教材やコミュニケーションしやすいグループの組み方、教材・教具の内容や提示の仕方を工夫した。グループ活動では、活動の内容により2から6人のグループを組み、会話することや作業を分担すること、協力して用具を使うことや作業をすることをさせる。グループ活動での計画・実習・反省時の会話は、手順を確認していたり、必要な情報を共有したり、次の活動のための合意を形成するために行っており、一人ではできなかったことがグループで行うことにより可能となり、「ともに学ぶ」ことから生活への実践へとつなげることができると考えられる。

ア 技術科：「延長コードの点検と修理」でのグループ活動の例（第2学年）

普段よく使われている延長コードの点検と修理を行い、身近な問題として考えさせるという題材を取り扱っている。この授業では、ループリックを用いて、問題解決に向かって意欲を持って追究し、解決のための方法を探ったりして、学習した事柄がやがて日常生活の中で生かせるように実践的・体験的な学習になるよう工夫した。また、技能や経験不足を補うために、グループで電気機器の点検を行う作業を進め、コミュニケーションする力を活用することによって故障部分の修理をすることができるようにした。

指導にあたっては、実習教材を用意し、グループで協力しながら点検・修理の作業が円滑に行えるようにした。また、視聴覚機器やワークシートを活用し、作業内容や結果の提示をわかりやすくするとともに、グループ活動における心構えを明確にするなどコミュニケーションする力の活用を促進するための工夫をした。

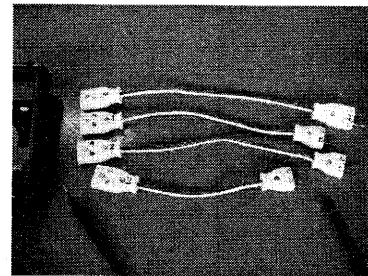


写真 点検用延長コード

表4 グループ活動の心構え

- | | |
|---|------------------------------------|
| 1 | 目標を持ち、みんなで協力し合いながら作業を進めよう。 |
| 2 | 内容を確認めながら、作業や話し合いをしよう。 |
| 3 | 見本や手本を示しながら、分かりやすく話そう。 |
| 4 | 作業の結果と自分の考えを区別し、理由や根拠を示しながら話そう。 |
| 5 | 相手の話はメモをとりながら聞き、分からないことはきちんと質問しよう。 |
| 6 | 誰の話でも耳を傾け、よい点や改善点を考えながら聞こう。 |

イ 家庭科：幼児との触れ合いのための準備と「幼稚園訪問」でのグループ活動の例（第3学年）

教師が体験の内容を事前に幼稚園側に伝え、体験場所や幼児の振り分けは、幼稚園の先生にアドバイスをいただく。幼稚園訪問でのグループ活動で、生徒同士がコミュニケーションをとることと、生徒と異なる年齢の幼児と「目線を低くして幼児の早さにあわせて、話をした」「幼児は、自分のことを話したがるので、話が終わるまで待って次の活動に入った」「幼児は、折り紙ができるたびに、『見て、見て』というので何回も『よくできたね』とほめてやった」などのコミュニケーションをとることで、他者理解のための方法

を身につけ、強調する力や実践する態度を身につけさせられると考えている。ここでは、幼児と生徒のコミュニケーションはもちろん、幼稚園の先生と生徒のコミュニケーションも必要になってくる。生徒は、幼稚園の先生から、「野球は、ルールを理解させるのが難しいので、庭に輪を描いてボールあてをしてはどうかな。ボールは力いっぱいになげてやると喜ぶよ。」「夏は水遊びが好きで、冬はなわとびやあやとりの活動を喜ぶよ。」などのアドバイスをもらい、幼児を楽しませるような遊びの内容を工夫することができる。また、幼稚園訪問中の生徒同士では、幼児の状況に合わせて臨機応変に「けんかしていたのでは、楽しくないので仲直りして鬼ごっこしよう」などと幼児をなだめて生徒同士が協力してグループ活動をすることができる。

表5 幼稚園訪問計画(時間配分)

訪問のための移動時間を含む
・先生へのあいさつ、ふれあいの内容説明(5分)
・幼児と仲よくなる時間(20分)
・グループで考えた活動(30分)
・さらに仲良くなる時間(20分)
・先生・幼児へのお礼の言葉・お別れ(5分)
・教室に戻って報告書・お礼の言葉記入(10分)

【訪問後の生徒感想記入から】

- ・3歳児・・・何とことばかけをしたらよいかとまどっていたら、幼稚園の先生が「一緒にやろう」と声をかけてくれた。
- ・4歳児・・・積み木遊びでは、手助けをすると、大きなものも作れた。
- ・4歳児・・・みんなで歌って踊ろうでは、幼児の得意な踊りを見せてくれた。
- ・5歳児・・・ボーリングゲームで、幼児がルールを理解して、順番を守って繰り返し並んで楽しんでた。



写真 幼稚園訪問の様子「踊ろうよ」



「折り紙しよう」

(3) 客観的な自己評価・相互評価のための評価の工夫

実践的・体験的な学習における反省・評価のときに、場の設定や主体的に活用できる力を育てるための客観的な自己評価・相互評価の方法を工夫する。自己評価では、生徒が過小評価や過大評価してしまうことがあるので、客観的な自己評価能力を育成するために、目標への到達状況、相互評価による他の意見と比較して客観的に自己評価することを意識させ、メモをとらせることや自分の言葉で反省を記入することをさせる。実際の評価では、活動の過程も大切にして、計画・実行・反省の活動記録をその時々記入させ、授業前の実態調査との比較により意識の変容や技能の向上をみる。また、自己評価や相互評価での具体的な項目を生徒に示す時に、活動内容や考えたこと、わかったことなどを具体的に言葉で記入させることで、授業内容の関心と次の活動への意欲を読み取る。

ア 技術科：ロボットコンテストで互いのロボットを評価しあう活動の例（第3学年選択）

表6のような指導計画により、3チャンネルリモコンロボットを用いて「ロボットコンテストをやってみよう」という題材を取り扱っている。ロボットの製作段階に応じた難易度のコンテストを設定し、各自が意欲的に、かつ目的意識を持ちながら学習に取り組めるようにした。問題解決的な学習における各ステップのうち、コンテストを「検証」の場として位置づけ、「評価・反省」を繰り返しながら、「課題解決」を進めていくようにした。

コンテスト時には、各自が製作したロボットについて自己評価および相互評価させ、意見交換をさせるようにした。ここでは、単に得点や順位に着目させるのではなく、「自分のロボットの課題点は何か」「自分のロボットと他のロボットの違いは何か」「他のロボットの素晴らしいところはどこか」など、自分や他の生徒の製作に対する取り組みについて、より具体的に評価させるようにした。この活動で、互いのロボットの工夫点や課題点を指摘しあうことで自分のロボットの課題点に気付くことができたり、改善点を見いだすことができたりしていた。このような自己評価・相互評価のくり返しにより、生徒が互いに刺激しあうことで、さらに伸びようと努力する姿が見られるようになった。

表6 指導計画

学習活動	問題解決的な学習の場面
(1)オリエンテーション	
(2)ロボットコンテストについて	課題探索
(3)製作計画の検討	
(4)ロボットの製作（走行部）	課題設定、解決
(5)第1回ロボットコンテスト	検証、評価・反省
(6)ロボットの製作（作業部）	課題設定、解決
(7)第2回ロボットコンテスト	検証、評価・反省
(10)ロボットの製作・調整	課題設定、解決
(11)第3回ロボットコンテスト	検証、評価・反省
(12)活動のまとめ	評価・反省

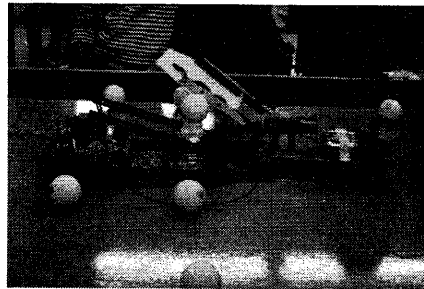


写真 ロボットコンテストの様子

イ 家庭科：幼児とのふれあい活動の発表会をすることで情報の共有化と相互評価にかす例（第3学年）

幼稚園訪問の後に、「幼稚園訪問報告書」と幼稚園の先生へのお礼の言葉を各自に書かせる。それをもとに、グループで、幼稚園訪問を終えての発表会をさせる。発表会では、具体的に活動した内容を説明すること、次に訪問する人へのアドバイスをすることで、発表を聞いている生徒への共感的理解を促す。幼稚園訪問から帰ってきたばかりの生徒の感想は、「楽しかった」「また行きたい」「すごく疲れた」「けられたけれど、かわいかった」など様々であるが、自分たちで考えて行動したことが、幼稚園児にその場で評価されるので、客観的な自己評価がしやすい。また、その後の生徒同士のグループでの話し合いによって、各自の考えがまとめやすくなり「幼稚園訪問を終えて」の発表会では、これからの生活でのいかし方や将来に役立てようとする意欲につながやすい。

生徒は、幼稚園訪問を通して、幼稚園児や幼稚園の先生と直に触れたことで、幼児とかわる自信や過去の自分を振り返り、将来の自分を考える手がかりとなる貴重な体験と捉えている。

家庭科では、見る・聞く・触れるなどの実際に手や体を動かして、対象となる相手を意識して具体的に活動内容を考えることが大切である。

表7 幼稚園訪問発表会の項目

— 幼稚園訪問を終えて —

- 1 グループの活動内容・メンバー
- 2 何歳児・幼児の特徴
- 3 実際の活動
- 4 活動での幼児の反応
- 5 幼稚園訪問を通してわかったこと
- 6 これから幼稚園訪問する人へのアドバイス

【幼稚園訪問の発表を聞いての生徒の感想】

- ・幼稚園訪問に、もう一度行きたい。
- ・幼児は苦手だったが、一緒に鬼ごっこをしてかわいく感じられるようになった。
- ・ものづくりは得意ではないが、幼児に楽しんでもらえるようなおもちゃが作れた。
- ・幼児と接するときの注意点や方法が、考えられるようになった。

表8 幼稚園訪問から考えたこと —グループの発表から抜粋—

活動内容 何歳児	幼稚園訪問を通して気づいたこと・わかったこと	幼稚園訪問する人へのアドバイス
おえかき 3歳児	・上手に描けなくても一生懸命に表現しようとする。	・ほめてもらうことが好きなのでほめてあげるとよい。
かくれんぼ 3・4歳児	・ルールを簡単にして、幼児のやりかたにあわせるとよい。	・けてきたときなど、「だめ」としっかり言わないとあとが大変になる。
劇「歯磨きマン」 4歳児	・動きをオーバーにすると喜ぶ。変身などがあるとよい。	・いっしょに動くところや質問に答えるところをつくるとよい。
鬼ごっこ 4・5歳児	・鬼をお面で区別するとよい。追いかけて始めるとやめない。	・目線を同じ高さにする事で幼児の恐怖感がなくなる。体力・我慢強さが必要だ。
砂場遊び 5歳児	・泥だらけになるので汚れてもよい服を用意するとよい。	・いろいろなことに興味を持って、すぐに行動に移すので忍耐と我慢が必要。

その他の活動内容：一緒に歌う、楽器を使って演奏、ぬりえ、トランプ、手品・マジック、どろけい、色おに、缶けり、ボーリングゲーム、水遊び・色水遊び、積み木、ブロック遊び、音楽に合わせてダンス、おままごとなど

3 授業実践の見取り

学習の終わりに、授業で扱った内容がどのように実践に結びついたかをN2法を用いたワークシートに記入させることを平成17年度より行っている。これにより生徒は、学習した内容について整理することができるとともに、学んだことを実践に生かそうと意欲を高めることができるだろうと考えた。また、この調査結果を累積することにより、教科の目標である「実践的な態度」の育成に役立てられるようになる。

今後は、コミュニケーションする力を活用することによって、教科の目標に近づけたかどうかの調査も行っていく予定である。

授業の内容を、家庭や学校など社会の中で「意識したこと」「生かそうとしたこと」などを具体的に各六角形の中にできるだけ書いてください。ランクは下記の通りです。

- A 実際に家庭や学校などで生かした経験のあるもの
- B いつかは家庭や学校で生かそうとしたもの
- C つなかりに気づいたもの

※数はいくつでもかまいません。6つ全部書く必要はありません。
※6つ以上あるときは自分で書き足してください。

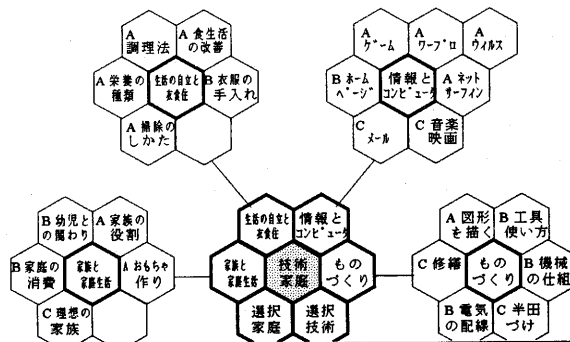


図2 調査用紙記入例

5 今後の課題

本年度は、研究の2年次であるため、実践的・体験的な学習指導を工夫して「自ら学び・ともに学ぶ力」の育成をはかり、実践的な態度を育てようとコミュニケーションする力の活用を通して研究を進め改善・修正をしてきた。今後は、さらに、学習の効果を上げるためにコミュニケーションする力を活用し、技術・家庭科におけるコミュニケーションの内容を明らかにしたいと考えている。そして、「自ら学び・ともに学ぶ力」の育成と実践的な態度を育てる学習指導についての具体的な指導方法の工夫や年間指導計画での位置付けを考え研究のまとめとしたい。

〈今後の課題〉

- (1) 本教科の授業改善の手だてと評価
- (2) 本教科の「自ら学び・ともに学ぶ力」を具体化した年間指導計画の作成
- (3) 研究のまとめと今後の課題

〔参考文献〕

- ・文部科学省：「中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—技術・家庭科編—」
東京書籍，平成11年9月 平成16年5月 一部補訂
- ・西岡加名恵：「教科と総合に活かすポートフォリオ評価」—新たな評価基準の創出に向けて—
図書文化
- ・金子書房，黒沢幸子：「指導に役立つスクールカウンセリング・ワークブック」
2002年9月発行
- ・森俊夫・黒沢幸子：「森・黒沢のワークショップで学ぶ解決志向ブリーフセラピー」
ほんの森出版，2002年4月発行
- ・日本家庭科教育学会編：「衣食住・家族の学びのリニューアル—家庭科カリキュラム開発の視点—」
明治図書，2004
- ・内藤 富久・二宮 紀治：「考えをまとめる技術」中経出版，1997年12月発行